



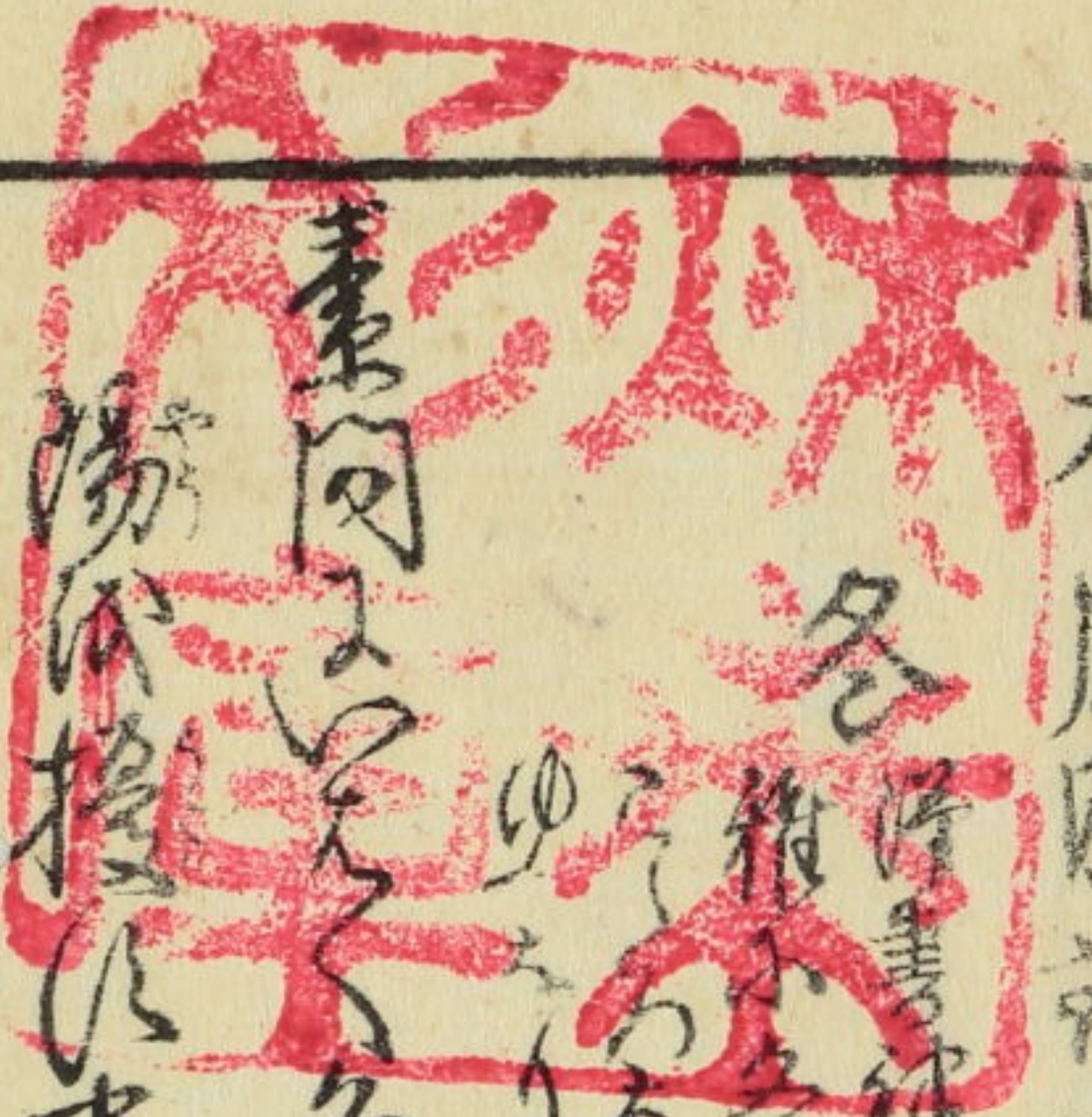
鑄 重

日本書紀

冬



日本歳時記卷之六



冬

諸書神皇志より冬を終まり萬物結成するなり雨
霜小多くと故寒く人の病多し冬と云へば神代より
ゆきありいと云へば

素問より冬三月これと閉藏といふ氷凍を地拆を
陽は掩ひ事ありて少く砂塵吹く起るなり必り老を
後と志して法するごとく匿るごとく私をいふ所の
あはく己よめるなり所ありてあはく免れんと志
温のつよは層と泄す事ぬる氣をうてと云ふ
ゆきありむらむらありれば冬を季に終るなり
おのれの道をいふこれより冬は腎を傷ひ其疾

日本歳時記

たしこむへうらん

○又法 青葉とよく洗ひこり乾し切り 毒粉(イロコ)と油の
茶少少あらしめく後まるとあらしめ水守(イロコ)を以て濁し清し
青葉一つんがく造し青葉かきゆかりよりまよ
麹とあらしめ洗ひこり清しけり又たはく
けきこ後入酒乃糖と米麹(イロコ)とつぎまよたの大根と
あらしめ洗ひ乾し方清し丸し

八月又竈を修繕す

八月 梅子の種焚きこりし取口と鴨し草し又
除きす但葉ふいふのつと用ひあまの梅(イロコ)を云

又月金慶義よりく十月は梅子の種まよとあしひ
種し母まよ月まよ種まよぬまよのつと灰まよとく
あしひあまよゆりまよとく次代年梅し栽まよ
けりてまよと種まよとく又月まよと本まよとく
たの書(イロコ)まよとく十月は葉のまよの枝と一尺まよ
まよとく日あまよた種まよとくまよとくまよとく
五月月まよとく根まよとく水邊林下まよとく
いそまよとくあまよの清まよとくまよとく
花(イロコ)まよとくまよとくまよとく
あらしめた西(イロコ)まよとく本まよとく紅(イロコ)まよとく

八月申より桐樹をとり紅葉多しと代置りし時より
 年の入り雨よりして運搬所の動候とくまれ
 十一月上旬より雪ありて凡紅葉を去れ
 花をとりけりてふりて因候所の紅葉は
 一総向の紅葉のみとゆいし事ありて今冬
 有し初雪の尾の紅葉を去りて雪の多
 運送候よりして是月暇帽と裁く事ありて暇
 取やせの暇暈の疾あり

げ月半よりくくくはは量所の積肉を食りて板と
 くくくは血脈とやゆい進とくくくは漢味多し一葉
 くくくは熱業とくくくは雨代多しとゆいし
 くくくは事とくくくは月令度義よりくくくは又
 燕と食りてあられ総肉と食りて病疾とありて
 来る事あり書よりくるなり

十月八日候より一水如氷才二地始凍才三雉入大水
 為屋太立才四三候より才四紅飛不見才五天
 氣と勝才六地をりし海閉塞才七大雪片の解
 立才八雪片の割中才九雪中才十初雪の雪
 酒及附 月令度義



和歌集卷之五

十一月

首と去雪と云中と去と云の十一月は去名併命
微服 律と去海と云〇十一月の初めと去月〇
去名併命に去と去海と云

朔日 周の代天子の月を以て、案者として、終れ、今日元
から周代時の西月元日なり、天子に并つるは義
ととわりのこと

冬を十一月乃中より二かとして、去法徳の二より
陽氣始く此に冬日の南より北へ、北より南へ
冬を代あ一日は聖りて法者本より二より二より一日の
冬より北より南へ、又北より南へ、二より二より一日の
冬より北より南へ、今日一陽本位して後陽氣日と

に長一日も度うや、長たる陽氣始く、中より北へ
く、労働より、次安んじて、微湯と熱より、閉戸、微
せして、事に行くと、人のあつと、又奴僕と、事
動、じりる、事、れ

易曰、需在地中、需者、主之、以、日、閉、開、高、旅、不、行、后、不、省
方、但、虎、通、曰、此、日、陽、氣、微、弱、主、君、亦、天、理、也、在、率、天、下
於、不、後、以、役、技、助、微、氣、來、地、也、伊、川、易、傳、曰、湯、始
至、夏、微、安、務、而、後、去、有、後、之、象、曰、先、主、以、至、日、閉、開、未、子
曰、一、湯、初、後、湯、氣、始、微、不、可、勞、効
〇今日、微と、畏、一、高、人、奴、僕、も、あ、り、之、陽、後、と、事、す

下又先祖考妣乃孟采少を献し茶酒とる又り
果とてむ下

○冬乙卯日瘧遂改火ハ瘟疫とてて後厚書行依
石ノ入るる瘧と瘧ニハ本とりて火とてりる
抄子夫々冬乙卯日

天時人事日依冬乙卯生喜又春刺紙五級流弱
瘧吹散古爰初飛座岸君は脈將好柳を春瘧
秋放梅雪也五珠郷國長教也且霞亭中林

○冬乙卯の法十日房事と忌くしとて
は比ハ人カハ氣とゆくひろ先かていづて

ゆくす事妻を根奉とす人素問の云冬乙卯
喜死瘧疫す又冬乙卯の前後各十日瘧疫す人

十五日 孟子の卒也一日あり

崖壁考云孟予崩報王二十六年上
月十五日也即今十月十五日

晦日 沐浴

予の國ハ農民は月ハ初代丑の日四社とありとて
とる又その服とてりる男女ありて飲食一人
とる事あり乞りのはりる人多人とて
賤乃男儀の女をた田代社とのひりて
とありしの中事とてりる未辨とてりて
如く耕代とてりる

相承傳記卷六

〇十二

西六回神を秋農氏といふ事あるべしこれハ秋農ハ人オホ

首といハ五月九日ある事ヤ西ノ年とお西三ノ月ハ

たぐい月よば事と事なる事ハ農事終ルハ西ノ月ハ

秋法と秋と記さる事ハ社氏田無イニク伊者ノ代始有秋法也

延寶初秋農初秋農ハ秋法也秋法ハ秋法也秋法ハ秋法也

ハ事ハたわとく事ハたわとくハ事ハたわとくハ事ハたわとく

事ハたわとくハ事ハたわとくハ事ハたわとくハ事ハたわとく

ハ事ハたわとくハ事ハたわとくハ事ハたわとくハ事ハたわとく

ハ事ハたわとくハ事ハたわとくハ事ハたわとくハ事ハたわとく

ハ事ハたわとくハ事ハたわとくハ事ハたわとくハ事ハたわとく

ハ事ハたわとくハ事ハたわとくハ事ハたわとくハ事ハたわとく

ハ事ハたわとくハ事ハたわとくハ事ハたわとくハ事ハたわとく

ハ事ハたわとくハ事ハたわとくハ事ハたわとくハ事ハたわとく

ハ事ハたわとくハ事ハたわとくハ事ハたわとくハ事ハたわとく

ハ事ハたわとくハ事ハたわとくハ事ハたわとくハ事ハたわとく

ハ事ハたわとくハ事ハたわとくハ事ハたわとくハ事ハたわとく

ハ事ハたわとくハ事ハたわとくハ事ハたわとくハ事ハたわとく

ハ事ハたわとくハ事ハたわとくハ事ハたわとくハ事ハたわとく

ハ事ハたわとくハ事ハたわとくハ事ハたわとくハ事ハたわとく

ハ事ハたわとくハ事ハたわとくハ事ハたわとくハ事ハたわとく

上よ花々の松葉とあそびてよまほ橋と付合さるや此の
 影よ柳とあそびてたれこくくしとよまを風あられや
 ひたごしとよまをい時をあくと能やとさしとよまを
 福まをいとくしとよまをいれ六月の比まを舞す橋
 より藥とよまをいれいへくしとよまをいれあつら
 くら何更くしとよまをいれあつら何れくしとよまを
 むまをいとくしとよまをいれ柳のさつら万をいれと柳下
 下流のけい今くくしとよまをいれ又生まをいれけい蓮葉
 とよまをいれつとくしとよまをいれ柳抽金橋と移りし地な
 柳を
 雲橋とよまをいれつとくしとよまをいれ柳柳と移りし地な
 さらけしとよまをいれつとくしとよまをいれ柳柳と移りし地な
 橋と移りしとよまをいれつとくしとよまをいれ柳柳と移りし地な
 移りしとよまをいれつとくしとよまをいれ柳柳と移りし地な
 又柳柳とよまをいれつとくしとよまをいれ柳柳と移りし地な

又柳柳とよまをいれつとくしとよまをいれ柳柳と移りし地な
 ○柳柳とよまをいれつとくしとよまをいれ柳柳と移りし地な
ひらくはとおれあひのる
これのやうくうまうまう
あひをいれゆきしはひとく
 好まをいとくしとよまをいれつとくしとよまをいれ柳柳と移りし地な
 雁更あつらとよまをいれつとくしとよまをいれ柳柳と移りし地な
 ましとよまをいれつとくしとよまをいれ柳柳と移りし地な
 てたれとよまをいれつとくしとよまをいれ柳柳と移りし地な
武事とよまをいれ柳柳と
まし柳柳とよまをいれ柳柳と
 たれとよまをいれつとくしとよまをいれ柳柳と移りし地な

精承抄書卷六

八葉菴子くびく終葉一四方四角が一日より控さし
か志大なり方四角く葉をとりけり中白く赤み出
能く日よりしてましくけりすまは入法く風吹水よ
ほくそましく凡種一まは種れ種と加みけり又三
久く種んちもたれくましく

○金橘一の法 金橘の大なるを取替油を以て外
ていこまめけり油をやく日ありて葉入口より
外一凡ひくさるやふぬましく

○大相葉の法 大相葉をとり葉を油をくけりまは
そり皮をこもへ油をたたくと葉を入るましく封入
○控一の法 控はあくとありてまは油を煮
しめりてありて貯ましく

六月菴子多くたたくて冬まの用は備之一葉を
一二寸のましくしてまは方と切きて菴よ入屋中へ納ま
去菴よ不ふちあうゆきうつる菴はかからぬや
よとこましくあわしく一葉をましく葉をましく
と加へく油を油とまれば氣のけりつものくた葉とあ
又六月菴を葉を根と多くかりて貯一也つら
ぬましくあわしく菴葉はかりてるのましくあわの初め
のましくあわしく菴葉はかりて貯一也つら

十一月の六候才一務目不鳴才二虎如交才三菰
糞出右大雪れ二候なり才四地凍結才五鷹
南解才六氷凍勃太冬止の三候なり

冬止金二十七刻二千分夜止千二刻二千分止也

芒種五附 月令唐最

日幸集時記卷之六

日幸集時記卷之七

十二月

歳と小冬と云中と大冬と云の十二月の異名 幸光 陰曆
歳月 歳と大冬と云〇十二月乃お名と云大冬と云は
び久佛名と云る所のありの終ると云ま世年終り云
このよと終り云る一 奥依抄云云云云 昔後曰云云云云
月云んは云云云云云云云云云云云云云云云云云云云云
そは乃圓は云云云云云云云云云云云云云云云云云云云
い云云云云云云云云云云云云云云云云云云云云云云
附云云云云云云云云云云云云云云云云云云云云云

新日殿乃代ふを建置れ月と兼書 せうくは今日ま
設の正月元日なり 四候これ日とこ子初日と云又こ
りららして候と祭 後上車り云云云云云云云云云
すり一車り云云云云云云云云云云云云云云云云云云
ゆきく身り云云云と終り云云云云云云云云云云云

春米為一案計多聚神白。隔中畢事。危之土

瓦倉中終年不壞。名冬春米。あきふゆ

○十六日此法屋中ハ煤塵と掃入一煤塵ハ掃入

世人多ク鉛白と乞て恒例ニす。此屋ニハ或風名此後所

有六朝日に物ナキ午多日ハ風名ナク。後日と用

圖書ハ障志を引て。後日廿四日毎家掃塵也

わさハ中掃入と乞て。又乞て。物ナク

二十日 北の後のこと 幽作ハ月中旬ナリ。清気ハ大緯儀

少く。西ハちりい。又緯儀ナク。膝と膝ハ急い急い。子と急

急い急いと。いして。ちりくの。後日と。いして。急い急い

く。ちりあ。いして。ちりく。いして。急い急い

却都ハよま。急事ナリ

○下旬ハ内親戚ヨリ送物一。て。果書と。急い急い

下此。親書ハ。急い急い。急い急い。急い急い

急い急い。急い急い。急い急い。急い急い

急い急い。急い急い。急い急い。急い急い

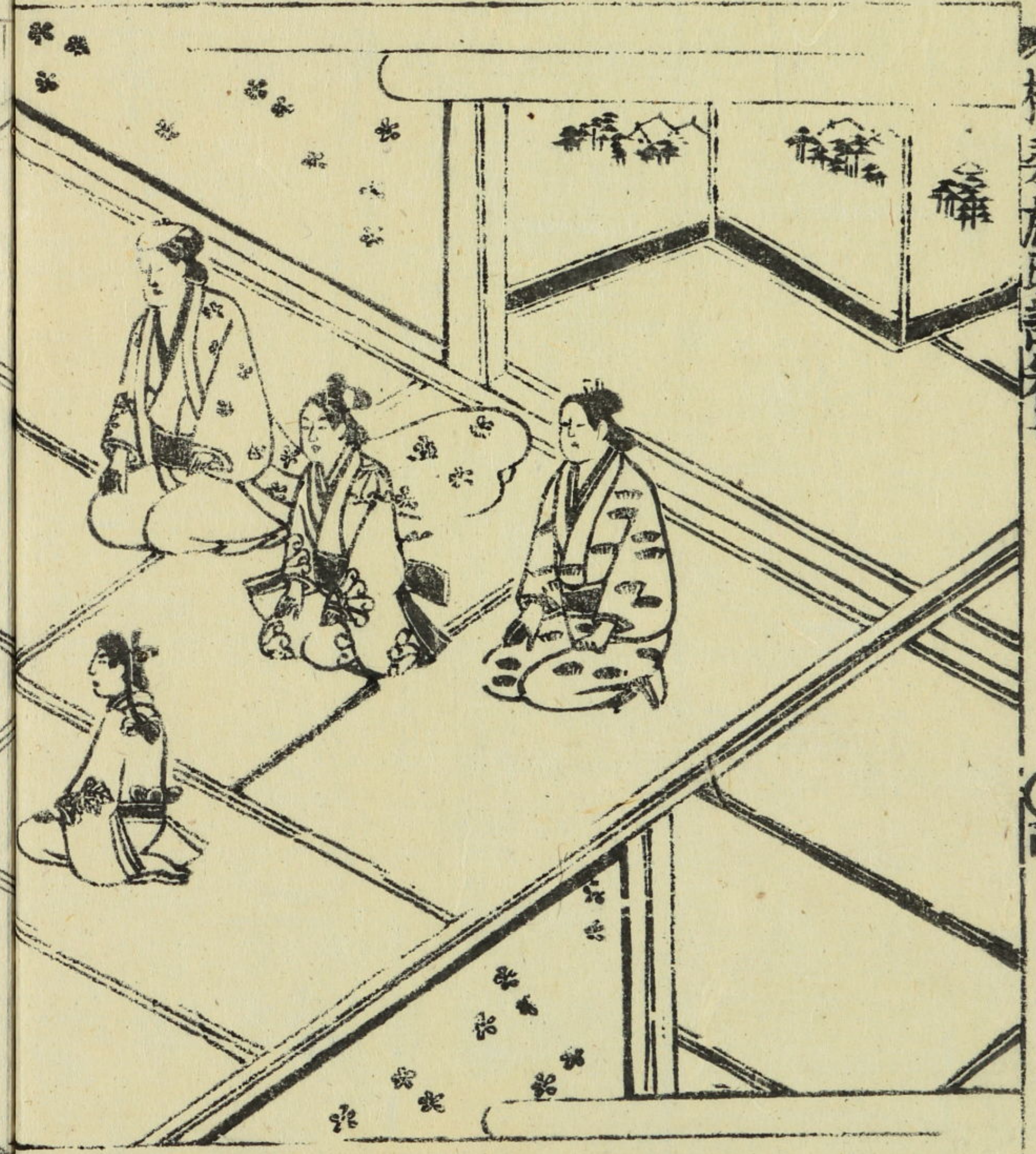
急い急い。急い急い。急い急い。急い急い

急い急い。急い急い。急い急い。急い急い

急い急い。急い急い。急い急い。急い急い

急い急い。急い急い。急い急い。急い急い

急い急い。急い急い。急い急い。急い急い



○は月下の午乃日ぬく〜と〜とと鴨をぬけよ
髪と一毛をち〜きは一年乃百歳よ何れもまを流
勢にわ〜と懐その所と意よ今〜よ〜と懐よ〜

二十六七日は比鶴と鶴をす〜は日〜と鶴よと鶴を
よの〜と鶴の肉を別に鶴と他り今日と年
に用ひの〜と鶴を〜と鶴と鶴を〜と鶴
鶴にして久〜鶴と鶴を〜と鶴
鶴のハ日教多く鶴より鶴を〜と鶴
鶴他と鶴は肉よ鶴〜と鶴の鶴〜と鶴
ハ鶴にや〜と鶴なり九鶴と鶴を〜と鶴

わの意よ鶴よ〜と鶴の意よ鶴よ〜と鶴
何れハ心わ〜と鶴の心わ〜と鶴
鶴にる〜と鶴の心わ〜と鶴
鶴と鶴を用ひハ鶴の心わ〜と鶴
にたす必〜と鶴の心わ〜と鶴
鶴酒の〜と鶴の心わ〜と鶴
鶴と鶴が〜と鶴の心わ〜と鶴
い〜と鶴の心わ〜と鶴

二十一日 暑毒と合ひ〜

○醫林集要 暑毒方 大黃 山椒 桔梗 肉桂 防風

傳入 疾時 出 疾時

各五各 順烏頭 白朮 菝葜 各二各 右八味野之條囊以

より深白に井中へ掛座に沈め元且より煎り

囊若くは湯を浸しぬ煎りしもの白くこれに飲後

に囊を井中へ懸し元と服す身は尚平瘰癧と

石病 菝葜の汁を末の事あり日本にもあり

○又方 本草綱目より、瘰癧之小疔方云、菝葜が也 赤朮 桂心 各七各

防風 一兩 菝葜 一各 蜀椒 桔梗 大蒼 各五各 烏頭 二各五各

赤小豆 十四粒 二角乃 律囊 一これと乃るこ亦有り

○又方 赤小豆の煮汁より煎りしもの肉はの皮はつ 大黃 一名 桔梗 去蘆 川椒 去皮各 白朮

各一各 烏頭 炮去皮屑 吳茱萸 二各 防風 一各

○本丸 屠蘇方 白朮 桔梗 二枚 防風 各一各 肉桂 五各

大黃 二各半

○白散方 白朮 桔梗 細辛 各一各

○瘰癧散方 麻芎 一名 山椒 細辛 防風 桔梗 乾薑

白朮 肉桂 各五各 已上三方與藥頭並安信濃方也

○此日より繩と依り後日代用之に

晦日 又海日 沐浴 此食倍多しより急際と用也

瘰癧の代後士より急なり

長秋藏乃家より急なり

生かすべし

○屋中一及宅中と共く掃落し、口をたて戸より

泣連種をかく

此等御座るは、明か此とあてた行ふは、乃かたりり、ゆつり至るは、多とせ

所へ云はれぬ

○今夜と除夜といふ又除夜といふ一年の終り、昔の

是の日は、いそいそとあつた、行服と急酒會と生祖

乃垂幕よそを、いそいそ酒會と食し、少くは、

何之て、せと事なり、いそいそ、いそいそ、いそいそ

まゝといふ、いそいそ、いそいそ、いそいそ

財を、いそいそ、いそいそ、いそいそ、いそいそ

願ふ、いそいそ、いそいそ、いそいそ、いそいそ

いそいそ、いそいそ、いそいそ、いそいそ、いそいそ

いそいそ、いそいそ、いそいそ、いそいそ、いそいそ

いそいそ、いそいそ、いそいそ、いそいそ、いそいそ

○今夜の床、いそいそ、いそいそ、いそいそ、いそいそ

いそいそ、いそいそ、いそいそ、いそいそ、いそいそ

いそいそ、いそいそ、いそいそ、いそいそ、いそいそ

いそいそ、いそいそ、いそいそ、いそいそ、いそいそ

いそいそ、いそいそ、いそいそ、いそいそ、いそいそ

いそいそ、いそいそ、いそいそ、いそいそ、いそいそ

元は、一、一、一月令慶義の、人、え、り

○今年中一、一、月、何、事、と、西、代、業、と、今、夕、中、在、り

焚、ハ、疫、氣、と、西、代、業、事、に、入、り、又、今、夕、在、り

本、と、多、く、焚、ハ、疫、氣、と、西、代、業、事、に、入、り、又、今、夕、在、り

○作、ハ、疫、氣、と、西、代、業、事、に、入、り、又、今、夕、在、り

焚、ハ、疫、氣、と、西、代、業、事、に、入、り、又、今、夕、在、り

本、と、多、く、焚、ハ、疫、氣、と、西、代、業、事、に、入、り、又、今、夕、在、り

○作、ハ、疫、氣、と、西、代、業、事、に、入、り、又、今、夕、在、り

焚、ハ、疫、氣、と、西、代、業、事、に、入、り、又、今、夕、在、り

本、と、多、く、焚、ハ、疫、氣、と、西、代、業、事、に、入、り、又、今、夕、在、り

○作、ハ、疫、氣、と、西、代、業、事、に、入、り、又、今、夕、在、り

焚、ハ、疫、氣、と、西、代、業、事、に、入、り、又、今、夕、在、り

本、と、多、く、焚、ハ、疫、氣、と、西、代、業、事、に、入、り、又、今、夕、在、り

○作、ハ、疫、氣、と、西、代、業、事、に、入、り、又、今、夕、在、り

焚、ハ、疫、氣、と、西、代、業、事、に、入、り、又、今、夕、在、り

本、と、多、く、焚、ハ、疫、氣、と、西、代、業、事、に、入、り、又、今、夕、在、り

○作、ハ、疫、氣、と、西、代、業、事、に、入、り、又、今、夕、在、り

焚、ハ、疫、氣、と、西、代、業、事、に、入、り、又、今、夕、在、り

本、と、多、く、焚、ハ、疫、氣、と、西、代、業、事、に、入、り、又、今、夕、在、り

つく鬼共目くららしく埃囊抄の志あり
 俗も石燈の影徳まのりぬる影徳乃役とし
 了れ毛此と向をくくその口ねこれにカぬされハ
 備る夜とあらをよてまの敷乃やう打きを
 用終礼記御終少もの言よりそれより後母ハ
 終後志よ志のさひしよりまの敷又選乃張
 御の東京賦の洋より又は北赤力又敷とす
 ろくくすやくくす漢漢書乃後乃力又く入ぬ敷乃
 中江互の中互ハ今御信の互うつをのりて風よ
 〇 おにやうひいし鬼と悲ひとくまをりは氏物終るまをて俗も
備とやうなうささきりぬらよとハ道とくまをりぬらと云

ありやうちぬ人ハまかこちハ角ありて佛書ハつら初終のつく
 まるし一は形を相ありしよりまをたお作ゆれハ形の家
 と形より形神ハ形とまをりてやう漢和ハ乱を成ぬる人
 をくくすまの物や道ハつらとおいしよありまは漢和ハ
 公ハさ油多りハまの形のりつらとん備を西ハ漢を和ハ漢ハ
 音多ハ漢を西ありハハ漢とん備とハ漢とハハ漢を和ハ
 又因信をまとうハハ鬼をくく編をうらハハ漢ハ
 たり披を海ま右人ハ漢ハ漢を和ハ漢とハ漢と
 勝本作ま形拋擲打息法方鬼眼精ハ和ハこれ
 大互と撰く鬼眼とらつとまをりてまをりて形
 志ハまの志ハのつとまをりてハ漢の鬼と
鬼とくまをりてまをりてハ漢の鬼と
 今花つと一のりら大敵と和ハまのりてハ漢と云

鬼乃人とくらんことあそとあせく御座りて
囊抄に口えわれこれ又あ他の夜るまは
とくはしらすくまはまはるあしりか
ゆれは上の法をいしりあはしり後
くしの書は枕算盡終屋津帳をいしり
の鬼とあせくまはるのいしりあはしり
○屠猪と今日いり井の中は海一重一重
海苔の海はいり

一杯茶酒を留跡坐看新年上
明日志和餅お餅不
明日志和餅お餅不

又冬通くゆめ

旅飯を飛宿る暇空に何事持渡り
思千里秋葉明報又一年

又方秋雁う

又与梅氣把一杯
の年事留の空一併閑

又王纏う

今家とあは明年四日休
又来氣色六中の客は
王後園梅

古今集の喜返列樹

とあるは、いふことありて、此の河津をいふは、
後唐をいふふ、為る事也

とあるは、此の河津、いふは、いふは、いふは、
西をいふは、いふは、いふは、いふは、

河川下流の因に
河川下流の因に

又此考
又此考

○は、衣類の形と、図考、枕の形、
て、今の世に、いふは、いふは、

枕の形、いふは、いふは、
枕の形、いふは、いふは、

犀の形、いふは、いふは、
犀の形、いふは、いふは、

犀の形、いふは、いふは、
犀の形、いふは、いふは、

犀の形、いふは、いふは、
犀の形、いふは、いふは、

犀の形、いふは、いふは、
犀の形、いふは、いふは、

書よ大瀧乃時依まゝの少邪念難くちりゆり
山崎於中 きりせり これをも獲れ事なる 獲れまの腹中
 引起して形何ものや 何れこれと合ふと此
 しつりたれ事 中より各々元世作れ人書れ事念難
 と禁むひ一はれち小雨千流不絶くして正西
 つくぬるたをあしかくもくもく若く着るる亦凶
 乃事何世いうも之書りれて巫俗も作してうた
 又と中世の書ん事と新の儀も世なるなることい
 ちやしゆりたく乃事な癡人の面おもふと使
 つくはとちりまげよさり事

乃世の書れ事念難くちりゆり
山崎於中 きりせり これをも獲れ事なる 獲れまの腹中
 引起して形何ものや 何れこれと合ふと此
 しつりたれ事 中より各々元世作れ人書れ事念難
 と禁むひ一はれち小雨千流不絶くして正西
 つくぬるたをあしかくもくもく若く着るる亦凶
 乃事何世いうも之書りれて巫俗も作してうた
 又と中世の書ん事と新の儀も世なるなることい
 ちやしゆりたく乃事な癡人の面おもふと使
 つくはとちりまげよさり事

○又と夜和と書く 禱乃下よ移りありこれ世
 之代遠文よあつともくちとちり人をあせく
 に源たつハ世俗の通患を世バあふたうく 獲れ
 家不入んうとこひぬぐひつあまありとせりは事
 尺身切しき 修んたかくいを病をうし 獲れ婦人
 女子乃たりあれはして丈夫より人たてまのいん
 ○世作れ事念難くちりゆり 獲れまの腹中
 引起して形何ものや 何れこれと合ふと此
 しつりたれ事 中より各々元世作れ人書れ事念難
 と禁むひ一はれち小雨千流不絶くして正西
 つくぬるたをあしかくもくもく若く着るる亦凶
 乃事何世いうも之書りれて巫俗も作してうた
 又と中世の書ん事と新の儀も世なるなることい
 ちやしゆりたく乃事な癡人の面おもふと使
 つくはとちりまげよさり事

改撰西暦より多し一節ありて多し

これと小婦人女子のたがひをさるゝして大妻の事
一三事よりあるは元世保ふ危き事男女との事
教ふより一三事ありしはよくおる事一三事
事ありしは年々あつた方人あつたは神のみなり
おきてる代実とまぬき人事をしむ倍至乃
とまぬきこれと幸しくして民の誠をつむるを
事ししはゆゑにこれし事一三事ありしは元
日幸の明記よりしるはしむるは元世保ふ危き事
一三事ありしは元世保ふ危き事一三事ありしは元

上は元世保ふ危き事一三事ありしは元世保ふ危き事
まくとしり七歳十歳二十歳二十歳二十歳二十歳
三歳五歳十歳二十歳二十歳二十歳二十歳二十歳
を湯代敷たり湯極れいなり元世保ふ危き事一三事
元世保ふ危き事一三事ありしは元世保ふ危き事
まくとしり七歳十歳二十歳二十歳二十歳二十歳
教ふとまぬきこれと幸しくして民の誠をつむるを
事ししはゆゑにこれし事一三事ありしは元
日幸の明記よりしるはしむるは元世保ふ危き事
一三事ありしは元世保ふ危き事一三事ありしは元

或歎人ひくりに物ゆきせむ〜〜〜と云ふ人
 乃能幽微務をくれば天命をまひ何〜そのまひ
 とまぬ事あるや〜の危年と云ふ事後漢書
 下置の事す〜ひん〜ひん〜
 ちち〜云々を乃後牙三の成此日と曠日と号〜
 はは弥とま〜又古代聖賢民は功ありん〜
 一〜渾身の儀あり〜又玉衡を典と曠は此
 能とま〜轉る百律と云ふ圓の〜
 小を大意二千日乃百今世後又意の中〜
 乃又食物甚物も〜製する〜
 乃〜人の旅世の此何事守り物り又記す

○穀量と製する法 黍量と定代中のあに七日
 亦曰又日浸〜〜取わの皮と三日〜平貯〜
 ○山菜と〜之貯〜一法 是法山菜〜
 年久〜の薯蕷と云〜い細力〜皮と去切〜
 て米粉とあ〜い〜あ〜つ〜ぬ〜と
 ○糲粟と糲米と凍粟と〜法 一日ぬ又漬〜
 一日の乾すぬ〜七次許〜
 ぬ〜糲粟〜
 一〜病入〜
 糲粟〜
 糲粟〜

てん腹よりすまは

○ 救末と乾物とまら法 救末と多く臍水に一日
後 益氣をばくし一曝乾をく瓶の入り蓋を一用
ろ紙を貼りて袋を二通に乾かす片の粘るをて胸腹を
不塞蓋をさきより糖紙の間に布の包てこれと沸湯に
投す之をばくし乾かす片を臍周回して湯中石の重き
○ 糖糸に粘りと乾物とまら法 上向に糖糸と葉の
く臍月の水に浸し毎日水と共二三日色をく石
臼とよく攪いて石臼末と磨きあるとよくえてまを
いとよく一瞬とい舞い石臼末をく磨きして又よくす

あふに桶よ入ふと加之一夜置くと湯あるとよく攪く
毎日水と攪く水花をとり三日くらとせと後糖糸布
の窮袋よたれた物を入してあると去極よたせるとよく
水とよく攪す世に湯よ多く瓶小入へりよくすあをこれ
あまよく文袋をくく多あくとよく去わるとよくあ
去りて袋より水をよくとて日よ布よあ乾きよた
時又このあをとりて湯平よとらありよく乾きよ壺
小八ふらとて一て氣の湯をわらふと一用ろ紙を
くこよく攪く一費湯よ投して湯を水に浸して
食り 湯を湯にけよく再煮て食り 又赤少量の煮て

くらじふんすといひく食の基英あり性燥熱を
この脾胃と福ふ善家計として再煮して用へし世宿
食の氣滞ありふを消くといひ

○赤大豆とも飛ぶ豆也 赤大豆と名し中々煮く
といふことた第一入くして煮たり法すのし收まり
年と行久しして中々用ても換世す是月一應候に
包し月くもも煮くは御時よ用やされと候す

○臘ふく粒と製し大豆切て二三日乾して湯水
よつれ又二三日ゆして五月一よまゆり米粉と削
きく又臘あるハまで煮る候はれは熱湯よハ
糞食れ肉もよく通るや湯の中にもよくゆかし難

煮く候に之くく煮て煎空し熱湯に漬けて米
豆粉と衣し一用ぬ替へんかく煮く性相氣
と石塞美久くくといひ五月一ハ二三日一度水
を換へし二月より毎日あとのあつしよつる

米粉と去されぬ換へし奥水し
○臘ありて煮候と製す人く久しして換せし凡
赤大豆と煮くは大豆を名す水と名候斗入
物食のち後ししは湯ありはれはれは後ハ火

りといえん改煮したるをて煮たりと候とありて氣

八減きりるらんむ一乃とちひひ夕食をまてとけの
 能は急製してありそ何又ゆ出とたはあてめて
 糸玉一白ふくよく餅くたははきくと飲より四胡
 ましゆして一用一煎のあのもろろわきこはは
 如此きれ一煎と功とと多く不費一して終無一
 豆汁不濃一して世余く味美なり又天と冬
 くだらさうく製せしめんともれハ大豆汁けぬを
 てりすれきる赤ま豆の味前一
煮る大豆とけらよ
白豆と一豆を
二三年一粒不
煮れに味格也

○白米の製法 大豆を石はと去ゆ一浸一
 蒸一製一して上白の米麴を石五斗或石八斗三斗
 合くよくくうとつふ桶よはめ豆二千日たう包て

用の味極く甘く色白一

○五斗米の製法 大豆一斗麴一斗酒糟一斗

米糠一斗塩一斗石一のよつふ合するちぬうのりて
 一い未習性極く勝布につるを次病人は月す

魚肉をくくと煮くればよし

○ぬうと製する法 米のぬうとあててかてぬ
 瓶みて能ひして製一はる何欠とたはまてぬ

垂製ぬうとつる何有かぬう一石一塩一斗米

并の薬性のくさくさ入白く結つるまじりぬりけり
乃の病のうらとさす一桶あくも親くてもはかばか
あく、至来年正月よふあか、又白く入つたもの
あく入る一

○又法ぬくと多にわかくこひたあ凡常の肉
に海らやまぬくあ桶くも親のくも入至十
又日碎してかきくあは白くかき白く入るく
くまくと増くといく白くはあかたけも桶く
ても親のくもあく入るとはまきりけりあてよ
くまよひく一たれははく久くくくく味あせは
奥のくはあり腹中のくはあきく一くく
あくに用一

○厚懸と塩淹るる法 厚鬼あれもとぬきよて
腸と去洗りすも塩せぬるれす腹上塩とて入
又甲たも海行あく塩と多くと入又外も塩と
よく付是といふまことあは鉄合せさうまにけりて
一和とけり塩ゆきとありあるも厚紙よつてくま
葱よつてまけり、さけま一法あれに塩淹れはあ
○塩淹るる法 海綿と鉄比よまき塩と多くはき
桶入るくあのかるあく一あよとらあは

令世一能くまひりくして終やし〜とまて
又薦（こも）を包てま〜りま〜し〜ははのちお〜く〜
こもに包纏（か）き〜く〜と〜つ〜も〜か〜け〜て一日も〜
とまよおひして堰た終りすつ附つ〜ま〜ま〜
〜し〜や赤土よ堰て〜

○魚名 鵜瀬乃は 魚名よ堰と名〜す〜

一日一夜至 趣は後ろ三をおと堰よはま

〜地と〜紙と〜く〜魚とぬ〜ハ糖〜堰
か〜す〜な〜く〜い〜ま〜ん〜の〜堰と用いぬる〜ハ糖か〜
ぬ〜堰〜して堰と出さ〜く〜魚名と糖に〜
〜の〜〜と〜堰〜

方々の堰表お〜す〜あ〜と〜に〜く〜ま〜つ〜で〜よ〜す〜お〜方
お〜風引ん〜く〜換ひ換換せされい〜魚名と糖せす
〜物と〜二〜番用〜て〜も〜よ〜〜と〜附〜く〜物〜く〜ハ堰
堰と〜如〜や〜ら〜ハ〜

○紐締 紐 乃た堰引よ〜りた大〜切〜し〜骨と云堰よ
浪さ〜い〜その〜く〜く〜く〜な〜ん〜は〜ぬ〜こ〜平〜ハ〜す〜堰
お〜び〜は〜れ〜屋下よ〜つ〜り〜ま〜け〜ま〜て〜よう〜堰堰よ〜つ〜こ〜の
よ〜と〜こ〜ま〜い〜い〜堰〜す〜よ〜堰よ〜堰せハ換換ハ堰の〜ハ〜ぬ
○銃太根と〜りた 中〜し〜初日花筒の〜は〜と〜

（Vertical marginal text)

根の末より名中繩八道ノ穴とわけ小繩より穴と
風ぬるを言ふとさくら日影印よりけきて大空の
終りより丸三平日さきより一 三き日日 又て
ぬけゆくぬ下共思よりけくま下ひく物
あつ物とてけりて風味喜佳

○胡荽（アサノ）苗乃つつけ物と製法下一とけ 胡荽苗の
大たりのとさくを能成二三日日夕一先ぬくこさ
つとを能成志とての満るに改換てす 一初より
とさくのこれ味さくく強く久くさきす
半量も又とつてけりてす

人の生果より事の中の中とゆふ人ありてさ
けすれ口舌とけらる後やうけ人の中とけ片
に切るとへ線月れさけらるけりまふりして強
湯と殺ふ泡とれ毒去りのけりてけりて程と
う世に毒量と又たけ 九字と泡とけりて毒湯
乃能とめく中とけりて後とけり又毒湯と
へへめひせとれ毒とす

定中の毒味と肝毒一 毒め殺乃精葉肌と毒と
殺め毒よ入る年をくすの地中けりてことと
毒ひ風ぬれ不殺やうけへ九脈毒水の現因と毒と

片の衣と云いこれと云ふは米と飯糰して
 入らんと云い一斗米ひゆると又他の穀は飯糰し
 たり米と云い穀子一斗或はたまの穀のくれ飯糰
 と用ひたり一斗うけてあつたる日同氣同く
 陰を晝湯温酒熱をくるとして併せて一斗と
 と温酒一斗と云い此の冷熱と云い多くと
 ぬるす又雄黄煇硝をきかして用て末に赤丹眼を以て
 縦横指志と云く十一月甲子の日と云い此の
 穀子一斗月令度義と云く横肉松肉生樹と云いと
 已に書きたる果菜と食ふべしと云い此の穀子一斗
 物代筋骨と食ふべしと云い此の穀子一斗

まうちんせんと云い牛肉と食ふべしと云い此の穀子一斗
 うの物と食ふべしと云い此の穀子一斗
 事かたれと云い此の穀子一斗
 他月これと食ふべしと云い此の穀子一斗
 損軒乃後と云い此の穀子一斗
 その多しと云い此の穀子一斗
 此の穀子一斗と云い此の穀子一斗
 此の穀子一斗と云い此の穀子一斗

修守のく次、いふりあられと、今けきよの六雜書に就
たるとそのく、（註）て人乃披閱、（註）て後きり、此可、（註）るハ
乃、（註）人此擇く、これと、（註）る程と、（註）るよ、（註）左のこ

十二月八日、右候身一、（註）厚州郷身二、（註）鶴姫巢身三、（註）熊取郷身四、（註）中多、（註）此二候あり、（註）身正、（註）難如乳身五、（註）仙多、（註）屬、（註）疾、（註）身六、（註）水澤、（註）腹、（註）望、（註）志、（註）大、（註）多、（註）此二候あり、（註）右一年、（註）十一月、（註）よ、（註）ま、（註）て、（註）七、（註）中、（註）二、（註）候、（註）あり、（註）二十、（註）二、（註）候、（註）あり、（註）ま、（註）い、（註）月、（註）令、（註）度、（註）書、（註）は、（註）り、（註）。

十二月、（註）星、（註）振、（註）ハ、（註）刻、（註）敷、（註）少、（註）多、（註）六、（註）日、（註）由、（註）是、（註）又、（註）我、（註）大、（註）多、（註）ハ、（註）与、（註）大、（註）是、（註）反、（註）就、（註）之、（註）月、（註）令、（註）度、（註）書、（註）は、（註）り、（註）。

日本書紀卷之七

都鄙祭事記

正月

元日 博中、（註）御、（註）所、（註）會、（註）○二日、（註）東、（註）酒、（註）本、（註）乳、（註）志、（註）松、（註）嶺、（註）子、（註）○四日、（註）志、（註）多、（註）井、（註）原、（註）流、（註）鶴、（註）給、（註）○七日、（註）博、（註）中、（註）所、（註）會、（註）々、（註）○管、（註）面、（註）山、（註）系、（註）才、（註）天、（註）系、（註）草、（註）橋、（註）川、（註）祓、（註）子、（註）○八日、（註）十、（註）日、（註）々、（註）と、（註）後、（註）七日、（註）御、（註）所、（註）會、（註）○十日、（註）西、（註）之、（註）文、（註）夷、（註）系、（註）○十三日、（註）南、（註）部、（註）心、（註）經、（註）會、（註）○十四日、（註）日、（註）上、（註）伊、（註）勢、（註）山、（註）田、（註）所、（註）子、（註）祓、（註）子、（註）○十五日、（註）其、（註）後、（註）爆、（註）作、（註）滋、（註）流、（註）親、（註）也、（註）一、（註）等、（註）能、（註）河、（註）内、（註）國、（註）平、（註）多、（註）所、（註）粥、（註）後、（註）景、（註）國、（註）博、（註）女、（註）松、（註）嶺、（註）子、（註）○十六日、（註）博、（註）中、（註）所、（註）會、（註）博、（註）林、（註）寺、（註）大、（註）放、（註）若、（註）滋、（註）流、（註）同、（註）魔、（註）堂、（註）念、（註）仏、（註）○十七日、（註）後、（註）人、（註）孫、（註）并、（註）為、（註）危、（註）丁、（註）○十八日、（註）博、（註）中、（註）爆、（註）作、（註）○十九日、

八幡夜祭 廿五日 法地忌 ○廿二日 赤山寺の寺
務也 正月 ○初宣 鶴子

二月

朔日 七日 立南朝西多野同午のりと二月堂新 ○四日
卯年忌 ○七日 古よりと南朝新の能 ○九日 十のり
少野新也 立南朝新 ○十日 少野麻苑寺忌 ○十一日
涅槃會 暖藏大徳松 立南朝新 ○十六日 暖藏
○廿日 廣石忌 ○廿一日 更寺修人孫 ○廿五日 送の
寺忌 少野天祚神忌日 立南朝新
八徳のり 飯茶寺南天祚忌 ○
初卯 大寺新忌 ○初午 龍島 志也堂 車福寺儀

法多 和泉國水乃与初午 ○上中春日忌 ○信多

三月

三日 替年 關籠 飯茶卯午 石山忌 和泉津忌 土流
卯年 卯年 ○又日 一寺寺忌 龍島寺忌 ○六日 一寺寺
法多 今日より十八日と暖藏大寺併 ○八日 泉浦寺忌
忌 ○九日 水尾忌 泉浦寺 石山忌 神のり ○十日 今日
安樂花 ○十一日 吉野會式 花見 ○十二日 今日より
月と天衣経 法 日在八馬の
初敷之り 今日より十八日と寺寺併大寺
忌 石山寺
中より ○十四日 壬午會併 立南朝新 ○十六日 比叟
武別角田川大寺併 山崎火の忌 ○十八日 泉浦寺忌

○十九日 湯袋新田引拔 ○廿日 東寺仁心弘法院
之儀 女坊 ○中午の台云々の午初日午云々 坊名西雲也 寺
主佛宗廟 之儀 兼攝 石屋水燈付也

巳月

朔日 以列苑麻也 ○二日 三日 南都云々の秋 ○四日
廣徳寺 苑田也 ○八日 清佛 山山戒壇堂 在也 ○
九日 清多地云々 ○十日 南都の法事 ○十六日 三
井寺 寺園云々の 十七日 紀州和号云々 御参臨
日之山 東照云々 尾列之古所 移設云々 ○廿日 勢
田見也 ○廿一日 志願御休 ○上卯 探名云々 山山修也

○上辰 御参 ○上巳 山山神也 以列苑也 同堂田也
○初申 大原也 平野也 ○初酉 松尾也 ○初亥 大原也
○中中 大田也 ○中卯 以列苑也 ○中辰 向日也 松尾也
○中巳 久也 也 ○中午 笑茂也 以列苑云々 ○中
申 笑茂也 山王日吉也 岩云々 ○中酉 笑茂
也 松尾也 松尾也 園白敷也 雲々 沖也 坊 ○中
之天 湯袋也

五月

朔日 笑茂也 湯袋也 湯袋也 ○二日 湯袋也
湯袋也 ○七日 今文也 湯袋也 ○八日

予治書の十二日 懐州家明部集〇十八日 今之集の十日
字作意見 十三日 坂本支社集〇廿八日 信吾沖田の
〇晦日 祇堂沖田集

六月

朔日 廿一と富吉訪〇二日 高橋の虫掛 廿〇又日
祇園分派の初〇七日 祇園會 今月より十日と祇堂
御旅集〇十四日 祇堂會 尾形清徳集 竹生集
信後類天皇集〇十八日 尾形清徳集 以代集
尾形清徳集 祇堂會 尾形集 尾形集 尾形集
今日より 尾形集 尾形集 尾形集 尾形集 尾形集
〇十六日 尾形集 尾形集 尾形集 尾形集 尾形集
〇十九日 尾形集 尾形集 尾形集 尾形集 尾形集

〇十八日 祇堂沖田集入〇十九日 尾形集
納後 尾形集〇廿日 尾形集 尾形集 尾形集
〇廿二日 大坂尾形集〇廿三日 尾形集 尾形集
〇廿四日 尾形集 尾形集 尾形集 尾形集 尾形集
〇廿五日 尾形集 尾形集 尾形集 尾形集 尾形集
〇廿六日 尾形集 尾形集 尾形集 尾形集 尾形集
〇廿七日 尾形集 尾形集 尾形集 尾形集 尾形集
〇廿八日 尾形集 尾形集 尾形集 尾形集 尾形集
〇廿九日 尾形集 尾形集 尾形集 尾形集 尾形集
〇三十日 尾形集 尾形集 尾形集 尾形集 尾形集

七月

朔日 尾形集 尾形集 尾形集 尾形集 尾形集
壇集 尾形集 尾形集 尾形集 尾形集 尾形集
〇八日 尾形集 尾形集 尾形集 尾形集 尾形集
〇九日 尾形集 尾形集 尾形集 尾形集 尾形集
〇十日 尾形集 尾形集 尾形集 尾形集 尾形集

○十二日 十五日 二十五日 廿五日 廿七日 廿九日 三十日 三十一日
五日 六日 七日 八日 九日 十日 十一日 十二日 十三日 十四日 十五日 十六日 十七日 十八日 十九日 二十日 二十一日 二十二日 二十三日 二十四日 二十五日 二十六日 二十七日 二十八日 二十九日 三十日 三十一日
八月 廿九日 廿八日 廿七日 廿六日 廿五日 廿四日 廿三日 廿二日 廿一日 二十日 十九日 十八日 十七日 十六日 十五日 十四日 十三日 十二日 十一日 十日 九日 八日 七日 六日 五日 四日 三日 二日 一日

八月

朔日 廿一日 廿二日 廿三日 廿四日 廿五日 廿六日 廿七日 廿八日 廿九日 三十日
村金 廿一日 廿二日 廿三日 廿四日 廿五日 廿六日 廿七日 廿八日 廿九日 三十日

廿一日 廿二日 廿三日 廿四日 廿五日 廿六日 廿七日 廿八日 廿九日 三十日
廿一日 廿二日 廿三日 廿四日 廿五日 廿六日 廿七日 廿八日 廿九日 三十日
廿一日 廿二日 廿三日 廿四日 廿五日 廿六日 廿七日 廿八日 廿九日 三十日

九月

廿一日 廿二日 廿三日 廿四日 廿五日 廿六日 廿七日 廿八日 廿九日 三十日
廿一日 廿二日 廿三日 廿四日 廿五日 廿六日 廿七日 廿八日 廿九日 三十日
廿一日 廿二日 廿三日 廿四日 廿五日 廿六日 廿七日 廿八日 廿九日 三十日

大津市佐文系 五條天部系 山科口の文系 依丸西秀系
 ○十一日 伊勢守幣 嵩 吉田くく 伊勢守海合。○十二日
 老秦系○十三日 白川系○十五日 完全系 桑田口系 江左村田明
 部之三年上之能能馬 河内之文系 老前小倉系○十六日 東
 山系後系 延喜系○十七日 勝別池田昌服濱和系○廿日 下系
 中系系 老前系 竹田系 建仁寺門 交東系 聖高之系 藤也
 の氏○廿二日 大坂府麻系 流系○廿三日 老秦系○廿四日 國統系
 本膳系 治土系 麻若系 別系 繁系○廿五日 天保流満之流
 田系系○廿六日 山下系○廿七日 勝別村系○廿八日 治流系 八坂橋
 系系○廿九年 國統系系○首月 中系系 老前系系

十月

又日 妙心寺遊入系 末日と海之寺法寺十夜○六日 南無佛
 寺法心會○十日 燈別金比良系 十よりと聖高寺唯之系○十
 三日 日蓮系彩依○十三日 聖徳系王院系五之尾地 松尾金利
 系○十六日 寺福寺系○十七日 内谷系沖津系○廿日 江
 左院商人系系 心修方河土作系系又松之系 中系 老前系法系

十一月

八日 山系系 推考群の系 ○十三日 老前系○廿二日 一向系二系三
 廿九日と系系の佛久○廿日 大佛儀 聖系大佛 三百年 ○廿六日 廿八日と
 系系系○廿日 之系系○初申 大文権系○廿日 然非系

十二月

十五日ハ城安居^久○廿二日大座寺^久○十九日廿方^久
杉尾^久の佛^久の種^久の晦日 祇^久を^久より^久け^久を^久より^久友^久の^久有^久利^久
乃^久律^久の^久の^久節^久の^久の^久條^久天^久律^久主^久 吉^久向^久也^久

け^久外^久國^久の^久大^久坐^久土^久保^久の^久の^久多^久信^久の^久の^久れ^久と^久を^久と^久し^久る^久
甚^久親^久唐^久流^久此^久知^久を^久る^久ハ^久只^久中^久信^久の^久の^久を^久と^久り^久と^久し^久る^久
何^久の^久の^久

相承家年譜

皆貞享五年戊辰三月上澣雒陽書肆日新堂壽梓

書

林

京都寺町通佛光寺	河内屋藤四郎
平日本橋通堂丁	須原屋茂兵衛
同 戒丁	山城屋佐兵衛
同 戒丁	須原屋新兵衛
同 南傳馬町堂丁	山城屋政吉
同 下谷御成道	英藏
同 大傳馬町戒丁	丁子屋平兵衛
同 之神明前	岡田屋嘉七
同	和泉屋吉兵衛
同	河内屋藤兵衛
同	河内屋政兵衛

